

富木尼御前御書

建治二年三月二七日 五五歳

がもく 筒 た おわ
 鷺目一貫並びにつゝひとつ給ひ候ひ了んぬ。

やのはしる事は弓のちから、くものゆくことはりうのちから、をとこのしわざはめのちからなり。いまときどののこれへ御わたりある事、尼ごぜんの御ちからなり。けぶりを見れば火をみる、あめをみればりうをみる。をとこを見ればめをみる。今ときどのにげざんつかまつれば、尼ごぜんをみたてまつるとをぼう。ときどのの御物がたり候は、このはわのなげきのなかに、りんずうのよくをはせしと、尼がよくあたり、かんびやうせし事のうれしさ、いつのよにわするべしともをぼへずと、よろこばれ候なり。

なによりもをぼつかなき事は御所勞なり。かまへてさもと三年、はじめのごとくに、きうじせさせ給へ。病なき人も無常まぬかれがたし。但しとしのはてにはあらず。法華經の行者なり。非業の死にはあるべからず。よも業病にては候はじ。設ひ業病なりとも、法華經の御力たのもし。阿闍世王は法華經を持ちて四十年の命をのべ、陳臣は十五年の命をのべたり。尼ごぜん又法華經の行者なり。御信心は月のまさるがごとく、しをのみつがごとし。いかでか病も失せ、寿ものびざるべきと強盛にをぼしめし、身を持し、心に物をなげかさざれ。なげき出で来る時は、ゆき・つしまの事、だざひふの事、かまくらの人々の天の樂のごとにありしが、当時つくしへむかへば、とゞまるめこ、ゆくをとこ、はなるゝときはかわをはぐがごとく、かをとかをとりあわせ、目と目とをあわせてなげきしが、次第にはなれて、ゆいのはま、いなぶら、こしごへ、さかわ、はこねざか。一日二日すぐるほどに、あゆみあゆみとをさかるあゆみも、かわも山もへだて、雲もへだつれば、うちそうものはなみだなり、ともなうものはなげきなり、いかにかなしかるらん。かくなげかんほどに、もうこのつわものせめきたらば、山か海もいけどりか、ふねの内か、かうらいかにてうきめにあはん。これひとへに、失もなく日本国の一切衆生の父母となる法華經の行者日蓮をゆへもなく、或はのり、或は打ち、或はこうちをわたし、ものにくるいしが、十羅刹のせめをかほりてなれる事なり。又々これより百千万億倍たへがたき事どもいで来たるべし。かゝる不思議を目の前に御らんあるぞかし。我等は仏に疑ひなしとをぼせば、なにのなげきかあるべき。きさきになりてもなにかせん、天に生まれてもようしなし。竜女があとをつぎ、摩訶波舍波提比丘尼のれちにつらなるべし。あらうれしあらうれし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へさせ給へ。恐々謹言。

三月廿七日

日 蓮 花 押

尼 ご ぜ ん へ